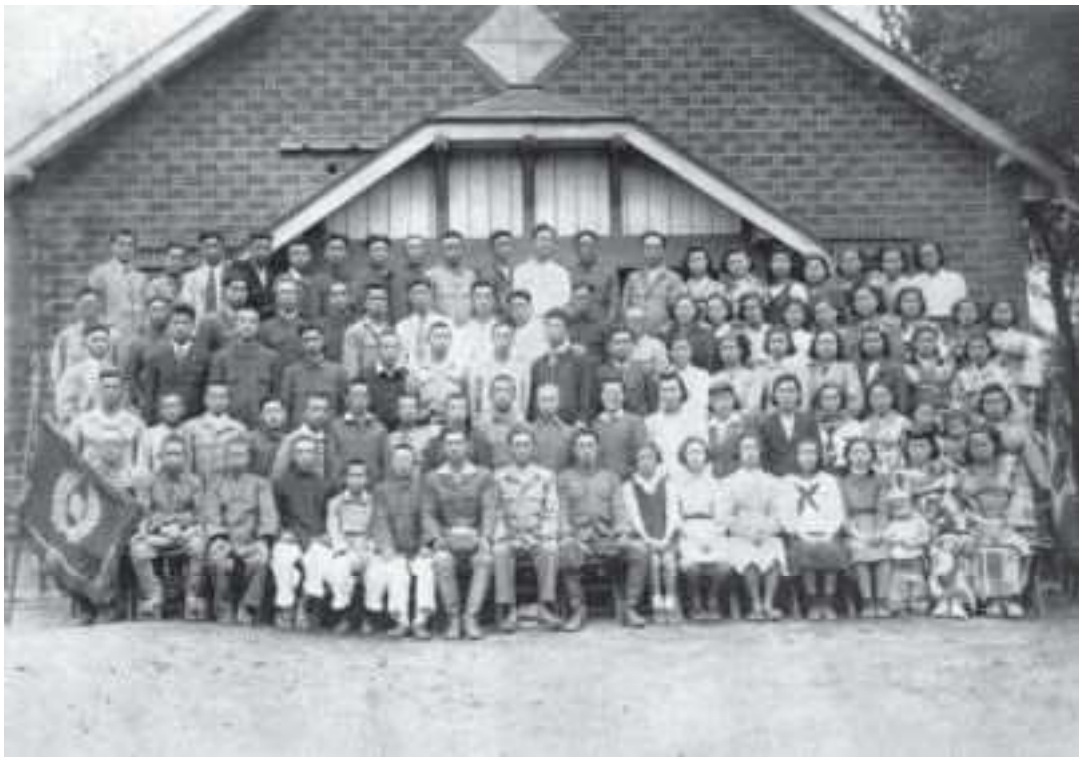
地域の意思決定は倶楽部で 今も残るレンガ積み「本通倶楽部」



昭和21年9月、本通倶楽部前での青年団本通分団の記念写真

相談のための集会所がほしい

入植以後、村の運営は開拓使・北海道庁の指揮下に置かれた戸長・村長が行っていたが、解決しなければならない問題が山のようにあり、部落（昔は地域の集落を部落と呼んでいた）細かな問題まで手が回るわけではなかった。部落の人たちが相談し合い、協力し合って生活が成り立っていたのである。

相談ごとは部落長宅に集まって行うのが普通だったが、家の人への遠慮もあり、気兼ねせずにいつでも集まれる集会所がほしいというのが共通の願いだった。

青年団が各地にできる

明治23年、白石学校（白石小学校の前身）に「徳義を厚くし、知識を交換する」ことを目的に白石青年会が設立され、各地で文化、農業技術などの技術や意見交換が活発に行われた。大正5年4月3日には白石村青年団が役場内に村長を団長として設立され、各地の青年会は統合された。

さらに本通、南郷、北郷など幾つかの分団に分けられ、分団はおのおのに倶楽部を建て、活動の拠点とした。青年団には尋常小学校卒業とともに入団することができ、年限は35歳までだった。

本通倶楽部の前身となった農友会倶楽部の建物（大正5年）

地域の集会に不可欠な倶楽部

本通倶楽部は大正期（年は不明）に木造で新築された。当時の青年団の活動は白石神社の祭典の全般の取り仕切りと青年団の競技大会への参加が主だった。

南郷倶楽部は昭和3年11月に南郷分団の活動場所として、団員のアルバイトなどで貯めた100円を基金に部落民の寄付を加え、大工に木材の切り込みを依頼した以外は自分たちで建築した手作りの会館である。青年団だけでなく、農事実行組合、婦人会、自治会、さらに娯楽や演芸などにも使われ、昭和41年3月に閉鎖した。

横町地区では分団とは別の横町特別青年会があり、横町親睦会からの寄付300円とお祭の余興（よきょう）残金などを基金に、

昭和 18 年の横町倶楽部

昭和11年、古電柱を梁（はり）に使って東札幌2条4丁目に横町倶楽部を建てた。当初は白石本村への遠慮から横町特別青年会館と呼んでいたが、数年後に横町倶楽部と改称した。

ここでも農事組合、白石神社打ち合わせ、婦人会などの会合に利用され、以来昭和46年の南郷通拡張で解体するまで地区住民のコミュニティセンターの役割を果たした。

本通倶楽部をレンガ造りで再建

昭和に入り本通倶楽部の建物は老朽化が進み、建て替えの話が出た。

当時の本通部落は、現在の国道12号の本通3丁目から17丁目間の両側に50戸の農家があった程度なので建築費を集めるのに困っていた。

この話を聞いた同部落に住む鈴木武良氏（15代目村長＝昭和7年9月15日就任・昭和7年11月11日退職・元札幌農学校教官）が1,000円の寄付をした。あまりにも多額なので返還しようという話も出たが、厚意を生かし、長く使えるレンガで建てることになった。

野幌のレンガ工場（布川煉瓦）と相談した結果、後の昭和30年前後に野幌地域で流行したコバ立て空間積みで組むことになった。空間によって防音効果と保温効果のある工法で、レンガ工場のモデル建築物として昭和3年に完成させた。

コバ立て空間積みは壁の中間に空気の層ができ、防音と断熱に効果のある積み方

昭和 21 年 4 月、南郷倶楽部の前に植樹をしたときの記念写真

間口5間、奥行10間の50坪平屋建てで、正面に舞台を設け、床はコンクリート仕上げ、窓は上げ下げ式、玄関は両開きのドアを取り付けたりっぱなものだった。

農繁期は季節保育所として

住民活動の拠点となった本通倶楽部に新たな要望として、保育所の機能が求められた。

戦後の白石はまだ農業が盛んだったので、昭和28年に奥山武雄氏が所長となって農繁期に幼児を預かる季節保育所を開設した。当初は農家の主婦が数人交代で面倒をみていたが、主婦が家業を休むことは農家にとって大きな負担だったので、昭和33年に専任の保母2人を配置して暁保育所を開設し、3～5歳65人が入所した。

保育期間は4月から10月までで、時間は一応9時から8時までだったが、保母が朝7時半に出勤したら、もう何人かの子供を置いて出かけている人もいた。

昭和30年に東札幌1条5丁目に造成された市営住宅の入居者で結成された緑栄会も、保育園を開設している。生活のために共働きしたくても公立の保育所が少なく、なかなか入所できなかったために、昭和33年に私立みどり保育園を開設した。

当初は会員が中心だったが、近接の美園・東札幌地区住民の入所要望があり、昭和46年に私立北の星保育園が開設されるまで60人から80人の園児を保育した。

本通倶楽部の所有者である柳本氏も倶楽部の保育所で育った一人である。接収したアメリカ軍が残していった粉ミルクの味が忘れられないという。

現在残っている倶楽部の建物は本通倶楽部だけだが、住民自治の拠点であったことだけはいつまでも語り継ぎたいものである。（岩渕清幸・富岡秀義）

昭和 30 年頃の航空写真で見た本通倶楽部（○印）。中央の道路は国道 12 号

連隊通に沿ってできた兵器補給廠（へいきほきゅうしょう）と官舎

完全な状態で残っている建物は１戸だけ。後ろ半分はアパートに建て替えられている

兵隊自身が造った道

開拓使が明治15年(1882)に札幌・幌内炭鉱間に敷設した幌内鉄道は、明治22年(1889)から北海道炭鉱鉄道株式会社が経営していた。その後、沿線の月寒に独立歩兵大隊が新設されたために、明治36年４月21日に白石駅を開業した。

しかし駅へ行くまでの道路が悪かったので、明治38年(1905)、村の人が土地を寄付し、白石駅から月寒の連隊まで兵隊の人力で道路をつくり上げた。この道は連隊通と呼ばれるようになった。なお、豊平区では月寒中学校からまっすぐ旧月寒駅（今のアサヒビール工場付近）へ向かう道を「連隊道路」と呼んでいる。当初は白石駅前からまっすぐに道路をつくる計画だったが、用地が取得できなかったために駅前に広場が造れず、通りも西にずれて、現在の状態となった。

大正７年（1918）に定山渓鉄道が白石駅始発として開通し、駅周辺は一層活気づいた。さらに昭和48年（1973）には経路変更で国鉄千歳線が白石駅経由となり、乗降客はますます増加した。

それでも昭和15年ころまで、今の駅前通と国道12号の間はカラマツの林が続き、家も４軒ほどしかなかった。

（塩見一釜）

区役所一帯は軍の補給基地の陸軍兵器補給廠

第二次世界大戦が始まり、昭和19年(1944)10月、白石に約38万平方㍍の土地に陸軍兵器補給廠（しょう）が建てられた。北方戦線への兵器物資供給のためである。現在の白石区役所付近には210,000平方㍍(地図上で計算)、その他にも分散して建てられたようだ。

12棟の建物があり、大砲、機関銃などの武器貯蔵庫のほか、故障した兵器を修理する整備工場、医務局も

「郷土史南郷」掲載の補給廠の様子を現在の地図に重ねた

あったという。爆撃を警戒し、この広い土地の中に分散して建てられた。軍事施設だったので、当時の建物の配置や写真を入手することはできなかったが、終戦直後にアメリカ軍が撮影した航空写真をみると様子が分かる。この建物の一部は後に釘工場として使われている。

近くに陸軍官舎も建築

兵器補給廠に勤める将兵の住宅として陸軍官舎が、今の白石小学校の東側に同じ昭和19年10月に建てられた。この官舎には陸軍中佐をはじめとした将校13戸、下士官及び軍属32戸、計45戸が住んだ。さらに現在の白中（はくちゅう）公園（平和通２丁目南４）には２棟を廊下でつないだH型兵舎が建てられ、50人ほどの兵士が寝泊まりしていた。

今も健在、払い下げ官舎

将校官舎は各戸に風呂がついていたが、 他の官舎の住人のためには共同の浴場があって、官舎の奥さん方が毎日3人ずつ交代で風呂を沸かしに通った。当時は浴槽が一つしかなかったため、男湯と女湯が １日交代となっていた。石炭と薪で沸かす五右衛門風呂で、畳３枚ほどのスノコ板が浴槽の中に敷いてあった。終戦後小川家が払い下げを受けて民営の浴場として「駒の湯」が営業を始め、長く親しまれたが、平成９年９月15日、敬老の日を最後に廃業した。

当時としては斬新なメートル法やコンクリートを使用

これらの官舎は当時としては珍しく、メートル法で建てられていた。そのため襖（ふすま）や戸は普通より幅広くできていた。ただ畳は普通の寸法だったため、畳の周囲に板が敷いてあった。また基礎も当時一般的だった束石ではなく布コンクリート製だったが、当時のセメント不足を反映してか、砂利の間に少しセメントが混じる程度のコンクリートだった。それでも幅の広いがっちりした基礎だった。また屋根も雪を落ちやすくするため、庇（ひさし）が中折れのなで肩になっており、独特の飾り板もつけられ、外壁は下見板で、窓には横長の板ガラスがはめ込まれていた。

戦後これらの官舎は希望者に払い下げられたが、そのまま住み続ける人はいくらもいなかった。本州から来た人が多かったので、故郷へ帰っていったものと思われる。平成8年5月現在、建築当時のままの家は １戸、その面影を残しているのは５戸である。

（鈴木祥覚）

長かった無医村時代。責任感強い吉田医師が開業し、村民に応える

昭和20年の暮れ、大通西4丁目から移築された吉田診療所。写真は翌年6月に撮影したもの

札幌に近すぎて医者が定着しない

白石村は開村以来長い間無医村時代が続いた。明治35年(1902)以降は札幌から巡回してくれる嘱託村医や学校医はいたが、札幌の病院にかかることができるほど札幌に近かったので、なかなか開業医が来てくれなかった。

太平洋戦争が激しくなるにつれて栄養状態は悪くなり、結核などで病んだり、衰える人が増えてきたが、そういう人たちが超満員列車に窓から乗り込んで札幌の病院に通うのは無理なことだった。

村人からの強い要望を受け、村役場は札幌医師会の副会長吉田廣に適任者の斡旋を頼んだ。しかし、若い医師が次々と軍医として戦場に送り込まれているときであり、簡単には見つかるはずもなかった。

吉田病院に疎開令、村医を決意

そうこうするうち、吉田医師会副会長の吉田診療所（北大通西4丁目南角）が戦時の重要施設である電話局に隣接しているために建物疎開令を受け、他へ疎開しなければならなくなった。吉田院長は村医の斡旋を引き受けた責任を強く感じていたときでもあったので、これを機に自分が村医になることを決心した。

吉田廣は明治28年11月に松前郡福島町で生まれ、千葉医専を卒業してから北辰病院に勤務し、北辰病院退職後の昭和3年(1928)に大通西4丁目に吉田診療所を開院していた。

診察カバンを肩にかけて白石村を歩いて往診する吉田医師

さっそく村から収入役と村議が出向き、正式に交渉したが、心が清く欲のない吉田医師はなんの条件も出さず、村医として村に移り住んで開業すると快諾してくれた。

診療に尽くし村人の信頼を得る

病院を解体して白石に移築することにしたが、時間的に間に合わないので、とりあえず石炭坑爆発予防試験所（今の平和通3丁目）北隣の北日本精機の応接間を借りて仮の診察所とし、自分たちや看護婦の住まいは、向かいの４軒長屋の２軒を借りて昭和20年５月８日に開院した。

開村以来75年目の白石村診療所の実現である。12月５日には移築が完了して、50㌢の雪の中を移転し、現在地に開業した。

吉田院長は尊大ぶることもなく、金持ちも貧乏人も区別せずに温かく診療に尽くした。札幌にいたときはお抱えの車夫が引く人力車に乗り、白足袋に羽織袴だったのに、遠方への往診もいとわずに下駄で歩き、愚痴（ぐち）ひとつこぼすこともなかった。

昭和25年に白石村が札幌市と合併した際に再び個人開業医吉田診療所に戻って地域医療を推進したが、翌26年５月18日、胃潰瘍（いかいよう）が原因で亡くなった。57歳だった。

この間、札幌外（ほか）四郡医師会長、社会保険報酬審査委員、北海道医師会常任理事などを勤め、さらに趣味の謡曲・狂言・俳句・古川柳研究などの面でも才能を発揮した文化人だった。

（塩見一釜）

昭和30年頃の吉田病院。敷地内にバス停の待合所を子息の吉田信医師（今の院長）が手作りで建てた

昭和23年頃撮影の米軍航空写真で見る仮住まいの吉田医院

東京大空襲で被災した板橋区民10世帯が水害と闘って開拓した

昭和25年7月31日、厚別川下流の水害。東米里地区は毎年洪水に悩まされた

空襲で焼け出されて北海道へ

今はない「板橋」の名は、東京都板橋区から疎開した人々が開拓した土地だったことに由来する。

疎開の決定的な動機になったのは、昭和20年(1945)3月10日と5月10日の東京大空襲だった。

終戦間近の7月6日、戦災で荒廃した東京を後にした197世帯、931人の緊急開拓者が北海道にやって来た。これは当時の警視総監・町村金吾（後の北海道知事）と、北海道農業会長・黒沢酉蔵が政府に働きかけ、戦災者北海道開拓協会・東京都・北海道が一般に公募した「拓北農兵隊」である。

津軽海峡を越え、函館に着いた板橋区の10世帯が、札幌村の助役から聞いた言葉は「札幌村には土地の余裕はありません。このまますぐ引き返してください」だった。

しかし荷物はすでに貨車で送ってあるので帰ることもできず、 苗穂で9カ月間の仮住まい生活を送った後、昭和21年4月に入植したのが後に板橋地区と呼ばれる土地だった。

農業経験者ゼロの出発

ここに落ちついたのは会社員、履物店（ 2世帯)、仕立て屋、船舶のコック、請負師、染物屋、床屋、漬物屋、公務員など10世帯で、1戸当たり2.3㌶の農地の割り当てを受けたが、農業経験者は 1人もいなかった。

札幌村のあっせんで、軍隊が保管していた木材の払い下げを受け、大工を共同で雇って、旧豊平川の堤防に家屋10戸を建設した。その後農地の追加支給を受け、5～6㌶の所有者となったが、当初は自分の食糧を得るのもやっとで、水害のたびの救済事業、冬の客土・出稼ぎ、ヨシ刈りなどの内職でなんとか切り抜けていった。

毎年のように続く洪水

板橋地区は海抜7.6㍍で、豊平川、月寒川、望月寒川（もつきさっぷ）、厚別川、三里川、野津幌川、小野津幌川と大小 7本の河川の水が集中する東米里（ひがしよねさと）の最末端である。融雪期や晩夏の豪雨期には氾濫（はんらん）した水で 1カ月間も水没し、 このためにできた大小の沼にはカモが飛来し、ハンターの狩猟の場にさえなったという。

東米里や山本一帯の厚別原野は、昭和16年に国が豊平川の雁来（かりき）に新水路の切り替え工事を行い、開発可能地域になった。昭和17年、農地開発営団が開発事業に着手し、東米里地区が入植適地となったのは国の開拓行政が行われるようになってからである。しかしそ

の後も水害は容赦なく襲ってきた。

以下は札幌市立東米里小中学校の開校記念誌『東米里』の年表からである。

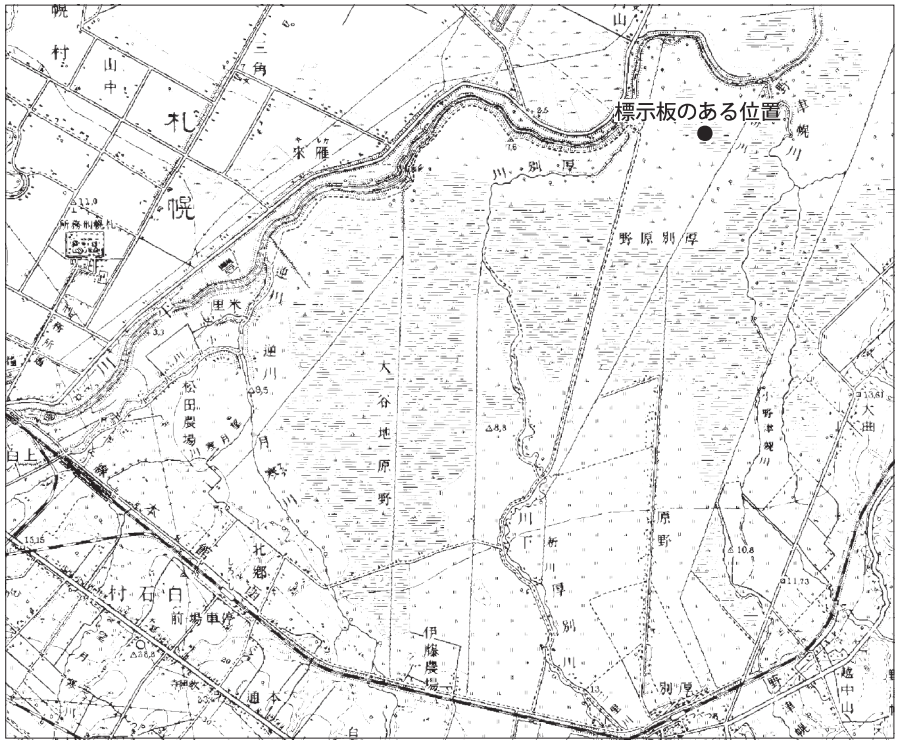
昭和 24.8.1 豪雨のため罹災
29．7.18 野火のため消防車出動
31.12.15 冷害給食実施
32．9.18 ～ 20 豪雨で臨時休校
36．7.26 出水で学校前道路水深 80 センチ
37．8．3～ 8 滞水し校舎床上 20 センチ
8.21 水害給食開始
39．2.17 吹雪で臨時休校
6．5 豪雨で臨時休校
40．2.15 吹雪で臨時休校
9．7 水害で集団下校
9.11 ～ 14 水害で臨時休校
9.18 ～ 20 豪雨で臨時休校
41．2.14 吹雪で臨時休校
3．3～ 8 融雪氾濫で臨時休校
8.21 ～ 22 豪雨で臨時休校
45．2．3 吹雪で臨時休校
3．7 吹雪で臨時休校
3.18 ～ 20 吹雪で臨時休校
12．3 吹雪で臨時休校
12．9 吹雪で臨時休校
47．9.25 水害で臨時休校
50．4．9 融雪氾濫で臨時休校
8.23 大雨で集団下校
8.25 ～ 26 豪雨で臨時休校
52．2.22 吹雪で臨時休校
53．3．2 吹雪で臨時休校
54.10．4 豪雨で臨時休校
10.20 豪雨で臨時休校
55．3.11 ～ 12 吹雪で臨時休校
56．8.23 ～ 25 豪雨で臨時休校
62．2.26 吹雪で臨時休校

公園緑地への変身

この間、第 1 次工事として、23 年に江別市元野幌地区での旧豊平川水路切り替え工事が行われ、25年には札幌ー江別間の 9 号道路が産業開発主要道路として建設され、以下順次各河川の暫定工事が終了し、昭和27年ころまでに入植は終わった。

第 2 次工事として 42 年に山本排水機場、44年に厚別排水機場、51年に月寒排水機場が完成し、人々の水害の不安も過去のものとなったと思われた。

しかし昭和56年の豪雨で発生した水害は老いた開拓者を打ちのめし、これを機に札幌市の長期総合計画都市環境公園構想がもちあがった。



昭和 10 年の 5 万分の 1 地形図（部分）。湿地と多数の河川で、板橋地区は洪水になりやすかった

野幌緑地、藻岩山緑地、手稲山緑地などをつなぐ一周 100 キロメートルの「環状夢のグリーンベルト構想」のなかに、厚別山本、白石東米里が「米里緑地」として対象になったのである。ここにゴミを埋め立て、21世紀へ向けて、幅50メートル、延長 6キロメートル、 8～10メートルの、起伏に富む広大な公園緑地帯を造成しようというのである。

このようにして出来上がる丘陵地に「郷土の森」や「万本桜の森」を作り、野球場、テニスコート、ゲートボール場、サッカーコート、ラグビー場、サイクリング・モトクロス場など、さまざまなスポーツ施設やピクニック広場、小動物園、市民農園などが整備されることになっている。またこの地域の水害に備えて、遊水池も設けられることになっている。

昭和 29 年の水害

ところで板橋地区の離農を早めたものは、水害常襲地であったことがその第一の理由であるが、昭和53年の道央自動車道造成のための買収と、ゴミ処理用地への転用の動きが重なった。このようにしてこの地区入植者10人のうち、平成 8年現在農業をしているのは東米里にただ 1人、そのほかは札幌の他の地域へ 4 人、他は東京へ戻った。

（塩見一釜）

農地転用による不規則な宅地造成を区画整理で解消した

区画整理が始まった当初（北都地区会館展示板から）

北都の由来は「大谷地の北東」

この地域は明治35年(1902)ころから開拓者が入り、幌内鉄道株主・北村英一郎が所有していたので「北村農場」といわれ、大正末期、厚別川氾濫による低湿地の原野約35万平方㍍を伊藤作一が買ってからは「伊藤農場」と言われるようになっていた。

北都団地になった地域は、これに隣接する「草刈り場」と呼ばれていた共有地と、東白石及び川下の一部を合わせた約77万平方㍍である。

この土地は昭和7年(1932)ころに水田耕作が始まり「白石村大谷地西農事組合」が設立されたが、21年(1945)土地解放により函館本線の北側の水田農家12戸が独立し、「北斗農事組合」を名乗り、以来通称「ほくと」となった。北斗の名の由来は大谷地地区の北東部に位置していたからである。

23年(1948)、他の地区に先駆け、函館本線の北へ電気が引かれた。

用水不足と後継者難で離農、宅地化進む

30年代に入り、火山灰台地の延長にあたる地域では、上流の水田の増加に影響され、年々灌漑用水の確保が難しくなり、38年(1963)ついに水田耕作を中止しなければならなくなった。

一方、昭和25年に白石村が札幌市と合併したころから、後継者難による離農者が出はじめ、さらに農地転用による不規則な私道と家屋の乱立が目立ち始めた。こうした状態を防ぐため、38年9月、旧伊藤農場関係者・北斗農事組合・北斗水利組合・川下地区関係者の約40人は、3割減歩負担前提の区画整理事業実施に踏み切り、39

現在の北都団地（北都公園付近）

都市化が進み、この一面の畑が虫食い状に宅地として分譲されてきた（北都地区会館展示板から）

年3月「札幌市北都土地区画整理組合」を結成、41年までの４年間の継続事業で「北都団地」を造成した。

これは農地を住宅団地化した北海道初の事業だった。まず幅20㍍の北13条北郷通を通し、区画道路６本（延長１万 2,700㍍）を造り、地番整備を行い、中心部には 広い公園と小学校用地、さらに児童公園４カ所を設けた。全区画のうち道路用地は21％、公園用地は３％、総工費１億6,500万円だった。

貨物駅による南北交通遮断問題

ところが事業が完成した直後の42年12月、国鉄貨物ヤードと札幌貨物ターミナル駅建設による踏切封鎖問題が起きた。地区住民は延べ 1,000人座り込みなどの強力な反対運動を展開したが、甲斐なく46年10月、サイロ型の入り口を含めて全長300㍍の長大歩道橋が設けられた。

現在この一帯は229.8㌶の流通業務地区が確保されており、北海道の物資の集散基地として重要な役割を担っている。そのうち154㌶は札幌市が分譲した大規模な大谷地流通センターで、現在はＪＲ貨物ターミナル駅、トラックターミナル、道路貨物運送業者56社、倉庫業19社、卸売業91社、自動車整備業組合などが事業を行っている。昭和59年には5,000平方㍍の屋内展示スペースをもつ総合見本市会場「札幌流通総合会館（アクセスサッポロ）」も建設された。

北海道の流通の中心、生活の利便も向上

平成４年には交通の大動脈である北海道横断自動車道が全面開通してこの地域を貫き、大谷地インターチェンジから流通センターに接続し、この地区はますます貨物輸送の北海道の中心になってきた。同時にマイカー利用が欠かせない市民にとっても交通網の充実は利便をもたらした。

昭和63年にはＪＲ千歳線に無人駅の平和駅が設置された。地域の南北を鉄道に分断されて不自由だったが、平和駅の設置によって交通が非常に便利になり、住宅地としても魅力ある地域になってきた。

なお、北都団地区画整理の由来は北都地区会館の階段室にパネル展示されている。

（塩見一釜）

昭和23年頃撮影の米軍航空写真に現在の地図を重ねたもの。この頃は一面が田んぼだった

札幌本府行き来の夢かけて 暴れん坊の豊平川に架橋

昭和24年の洪水で中央部15㍍を流された東橋

札幌本府との往来を阻む豊平川

大河、豊平川の札幌本府対岸を開拓の地と定めた白石は、豊平村同様にひんぱんに川を渡る必要があった。

明治初期に架けられた豊平橋は毎年洪水で流された。明治7年10月22日には白石村戸長の佐藤孝郷が通行止めのために札幌本府に出庁できない届出を出した記録が残っている。

豊平川は流れが幾筋にも分かれて広がっており、小さな橋がそれぞれの流れに架けられたが、春の雪解けや台風による洪水があると、ひとたまりもなく流された。病人などの緊急事態があっても、水が引いて再び橋が架けられるまでじっと待たなければならなかった。

アメリカ人技師による本格的橋

日本の技術では完全な橋は造れないため、先進国アメリカの技術者に豊平橋の設計を依頼した。最初はホルトによる長短2連の木製橋で、明治9年12月に完成した。人々は永久橋ができたと喜んだが、5カ月後の10年4月の洪水で破壊されてしまった。

この豊平橋はホイラーによって改造された。短い橋を撤去して一つの橋とし、11年10月に完成した。この橋も長くはもたず、何度も架け替えられることになった。

最初の東橋

白石の人たちが札幌本府に行くには、横丁から現在の国道36号に出て、豊平橋を渡るしかなかった。

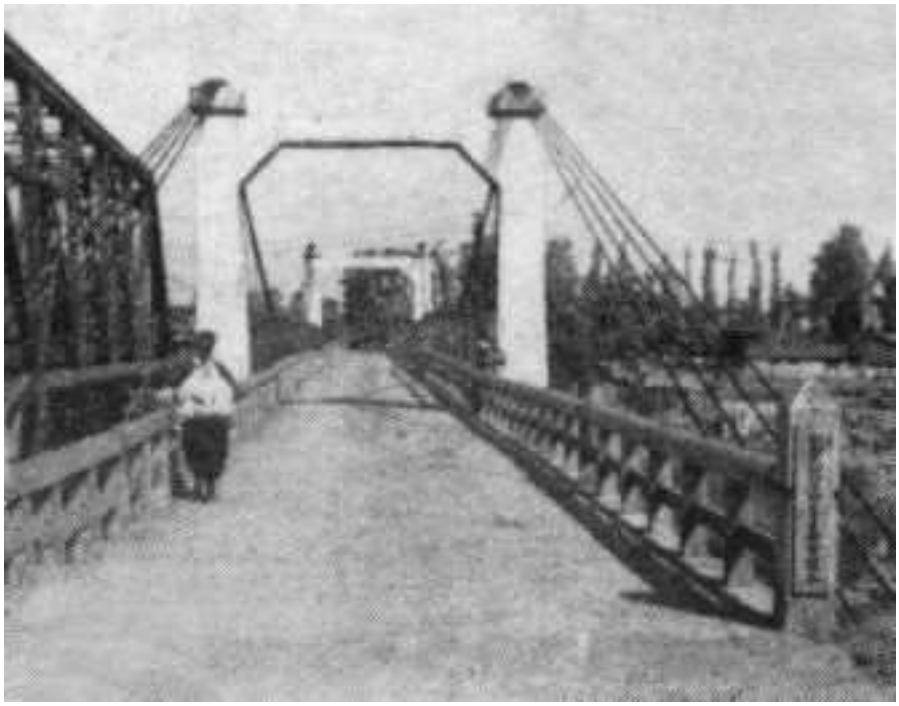
北海道庁は明治22年8月、北1条東4丁目を起点にして上白石村と白石村を経て江別に至る道路の建設に着手し、総延長17.7㌔が翌23年11月に完成した。

このときに豊平川に長さ40㍍の吊り橋と78㍍の連続した板橋が架けられた。明治22年8月着工、23年11月完成で、札幌の東にあるのと大正天皇が東宮（皇太子）になられたのにちなんで東橋と名付けた。

東橋が完成すると札幌市街との交流はひんぱんになり、特に上白石村は戸数が激増した。明治23年末で白石村が開拓当時の3.3倍の345戸になったのに対し、上白石村は分村当時の7.5倍の200戸にも達した。その後稲作試験所や明治35年6月には宇都宮牧場なども設けられた。架橋の効果は絶大である。

しかし明治31年9月の大水害で橋は壊れ、洪水で大きな被害を被ったために戸数が激減し、上白石村の戸数は一時は120戸位までになった。

木造の一条大橋



吊り橋時代の上白石橋。鉄道橋がすぐ隣にあるが、現在は50㍍ほど離れている

豊平川鉄橋は明治14年に完成

東橋は人が通れる橋としては豊平川第二の橋となったが、その前に鉄道専用橋が完成していた。岩見沢の奥の幌内炭鉱から、石炭を札幌経由で小樽港まで運ぶ幌内鉄道の橋である。鉄道は明治14年4月に着工し、12月には豊平川など28カ所の橋を完成させ、15年11月には幌内まで全線が完成した。

遊郭へ民設の一条大橋で

薄野にあった遊郭が他へ移転されることになり、上白石が誘致に成功して現在の菊水地区に移転することになり、大正9年に移転が完了した。通称白石遊郭の誕生である。

しかし、札幌からは豊平川の対岸にありながら、遠回りして東橋か豊平橋を渡らねばならず不便だった。そこで関係住民が大正12年に一条大橋を架け、大正15年に札幌市に寄付した。昭和11年9月の洪水で一部が流失、残りも使用に耐えない状態になったので、札幌市は昭和13年に鋼鉄製の永久橋に架け替えた。

分譲地に架けた民設の上白石橋

鉄道橋に隣接した上白石橋も民設の橋である。菊亭侯爵が健康を害して京都に引き上げ、売り払われた上白石の農場を大正15年に北海道炭鉱汽船株式会社が買収し、昭和2年に区画整理にとりかかった。この分譲地に直結する橋が必要だったため、橋脚がコンクリート製の吊り橋を昭和5年に架けた。昭和15年には白石村に寄付されている。この橋は自動車が1台しか通れないため、昭和47年に隣地に長さ263.8㍍、幅6.3㍍の永久橋を架けた。

位置を変えた東橋

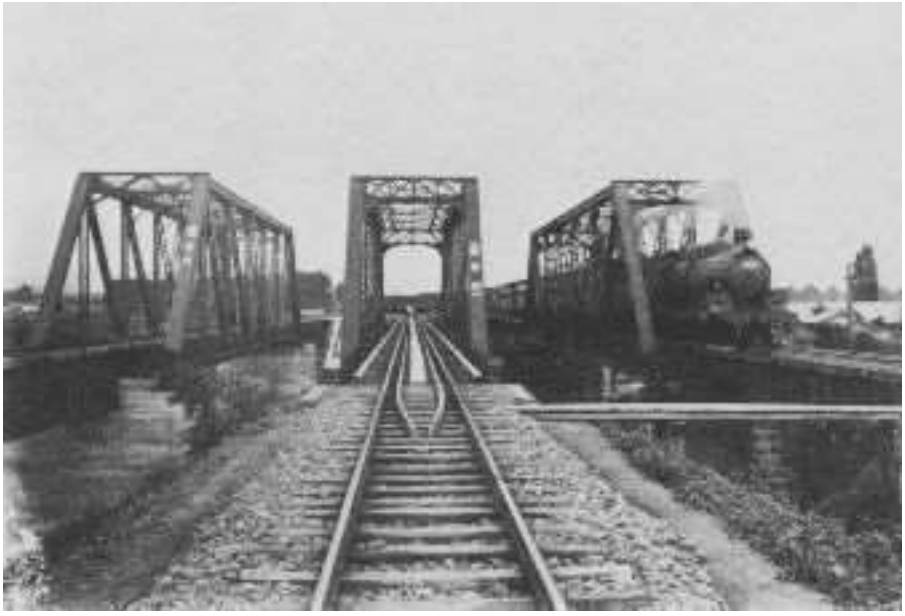
明治31年に流失した東橋は豊平橋と同じく何度も破損あるいは流失しているが、昭和4年の春の水害でも流失している。

札幌市史には次のように記述されている。「東橋は豊平川と同じように度々の出水で流失破損し、その都度架け換え修理を行ってかろうじて保ってきたが、昭和4年春の出水でまた流失した。

そこで豊平橋に次ぐ堅牢構造の橋を架設する前提として、上流150㍍地点に仮橋を架けることになった。36㍍の木造ハウトラス橋と15㍍の桁橋5連、総延長98.6㍍、幅員5.5㍍のものを昭和5年11月に完成した。仮橋としてはりっぱなものであった。この橋は17年と23年の洪水で破損して改修したが、24年の洪水で橋脚は沈下し、橋桁の一部は流失してしまった」

昭和24年10月、現在の北1条東14丁目の位置に延長132.7㍍、有効幅員13㍍の鋼鉄の橋脚5基のゲルバー橋架橋に着手し、昭和26年に完成した。それが現在の上り線（上流側）である。当時は片側1車線で、交通量の増加に伴い昭和44年下り線（下流側）が架橋された。高張力鋼の出現や溶接工法の全面採用で3基の橋脚で渡っている。

（鈴木祥覚）



豊平川鉄橋。左端は大正15年開通の北海道鉄道で昭和6年から定山渓鉄道が乗り入れた。昭和初期の写真

伴の渡し（豊平川渡船場）跡

伴の渡しで豊平川を渡り買い物も学校も対岸の村へ

落合橋から見る旧豊平川。流れが止まり、両岸に草が茂り、かつて急流だったとは思えないほど穏やかだ

重要な豊平川の渡し場

この渡し場は、旧豊平川と旧厚別川の合流地点で、落合という所にあった。落合という名は、川が落ち合うところからきている。

白石村開基七十年記念白石村史（昭和15年9月10日発行）には「白石村字米里に札幌村に通ずる渡船場一箇所あり、豊平川を渡るものなりとす」と記している。北海道文書館の北海道官設渡船場資料（三）の豊平川の項には、白石村字米里に北海道庁が大正6年10月5日に設置の告示をしたことが記されている。

当時の米里地区は、白石村史（大正10年4月10日発行）に「米里地区は松田開墾地入口より落合までとす」と、米里の地域を示している。松田開墾地は大正5年版の5万分の1地形図に「松田農場」と記載があり、函館本線北側から望月寒川と逆川と小川に囲まれた範囲を指している。

白石村字米里は、明治23年（1890）の一ノ戸多三郎、本庄春蔵ら9戸の移住開拓に始まる。

米里開拓の先駆者である本庄春蔵は、明治25年に水田約3反歩（約3,000平方メートル）、一ノ戸多三郎は5畝歩（約500平方メートル）を試作した。明治27年には逆川に米里水門を設けて用水路とした。

米里の名は明治26年に本庄春蔵と藤森徳太が「米が豊かに実る里」の願いを込めて役場に届け出て命名した。

この地域は現在の東米里地区で、低湿地帯であるため、たびたび洪水に見舞われ、離農が相次ぎ、長い間放置されていた。再度入植を試みたのが大正3年（1914）頃からで、河川の整備にも着手されてきた。

学校は船で対岸の対雁へ

昭和17年（1942）頃に木造の落合橋が架けられたため、伴の渡しは廃止された。伴の渡しという名称は、近くで農業を営んでいた伴さんが農業のかたわら船頭を務めていたのでそう呼ばれた。

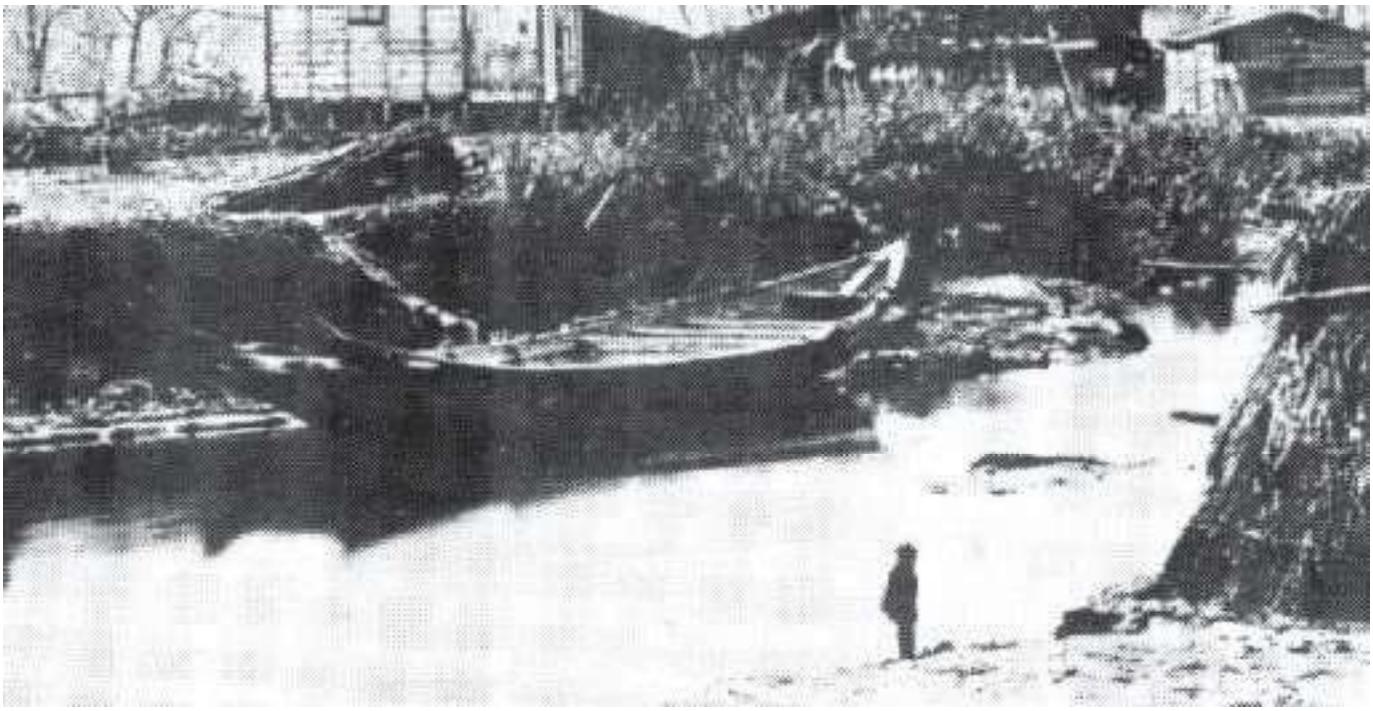
当時の渡し賃は、近くで生まれ育った古老の話では「子供3銭、自転車を含めると5銭で、馬と馬車は20銭だった」とのことだ。

東米里では白石の中心部に出る機会よりも、伴の渡しで川を渡って雁来に出て苗穂に行くことが多かった。白石側よりもはるかにりっぱな幹線道路が札幌から江別へ続いていたからだ。札幌から江別を経て幌内炭鉱へ至る道路で、明治13年頃にはできていた道路だ。落合橋ができてからも同じように東米里の人はこの道を使った。

一面が平原のため、冬は札幌の街と全く違った吹雪き方をした。激しい地

渡船場があった場所

標示板なし・渡船場があった場所：東米里 2050



渡しに使った船の記録はないが、この写真の船と同じようなものと思われる（明治４年伏古村）

吹雪が吹き荒れ、一寸先も見えず、吹き溜まり、道路を探すのに苦労した。そのようなときは馬と一緒にいると安全で、馬は確実に家に導いてくれた。

小学生は豊平川の対岸の江別の対雁（ついしかり）分校に渡し船で渡って通学した。渡しでの人身事故はなかったが、個人の船では何度かの事故があったという。

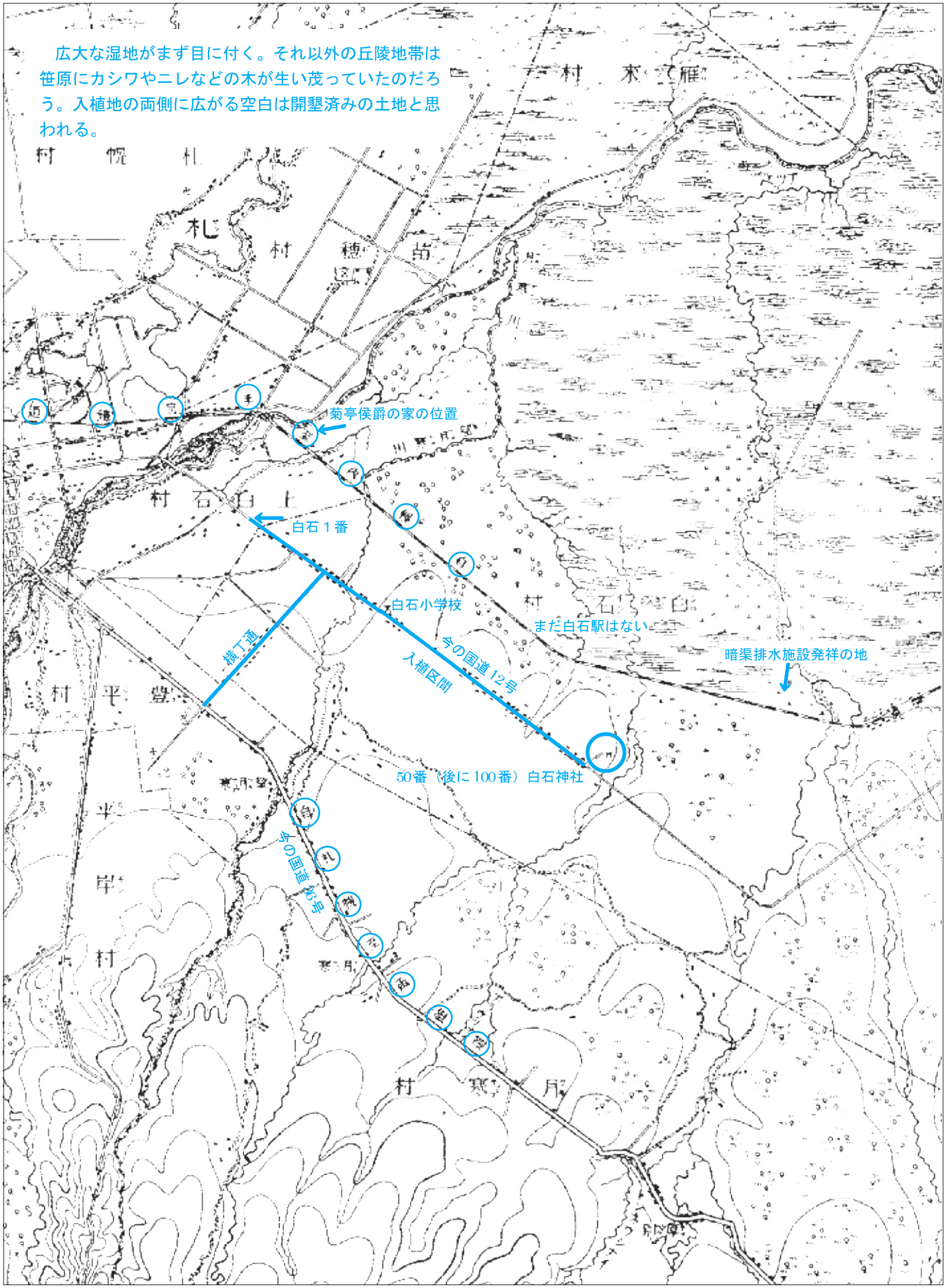
東米里は農地開拓営団の事業で開拓が進められたり、戦時中に緊急開拓者の入植もあって人口が増え、昭和２４年(1949)12月26日に東米里小学校が誕生した。

伴の渡し場があった地区や東京の板橋区から入植した板橋地区は札幌市の緑のグリーンベルト構想の地域に指定された。ゴミで埋め立てられた後、大規模な公園に生まれ変わる予定で、一部公園造成が始まっている。豊平川は雁来橋付近でショートカットされて石狩川へ注ぎ、伴の渡しがあった部分は水の動きのない旧河川となり、静かなたたずまいをみせている。

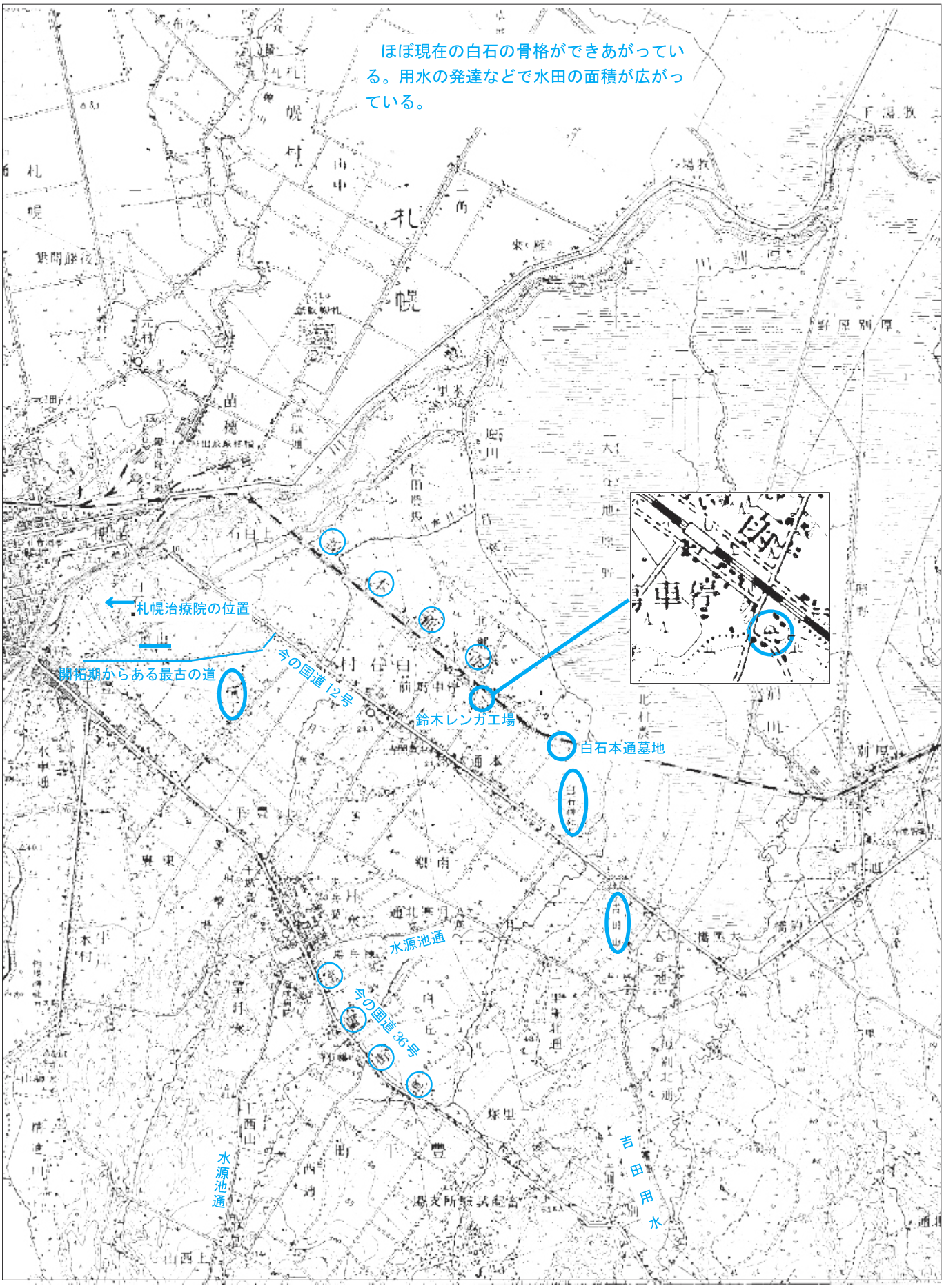
（南部　享）

大正５年の５万分の１地形図と伴の渡しの部分拡大

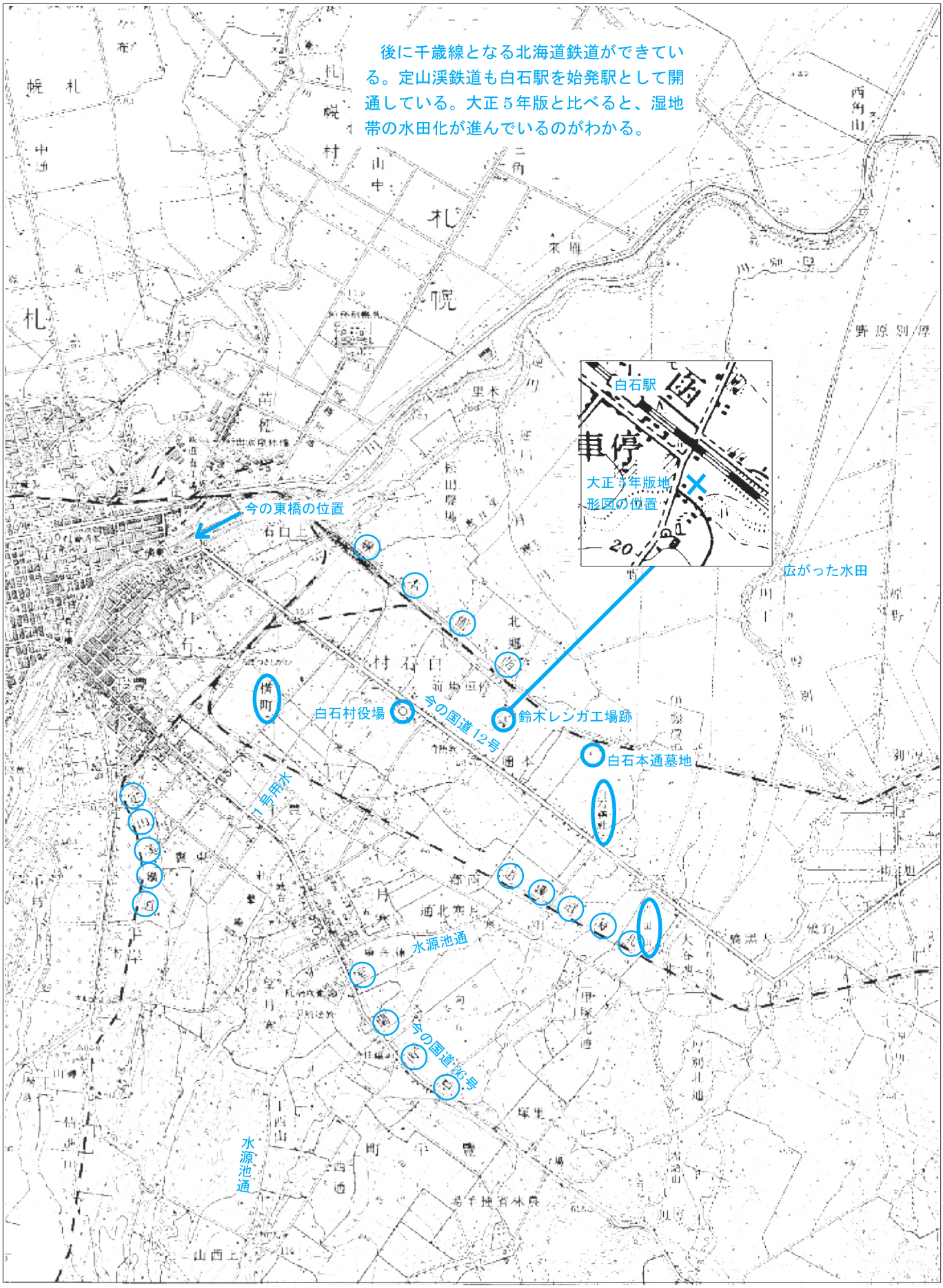
明治 29 年の５万分の１地形図



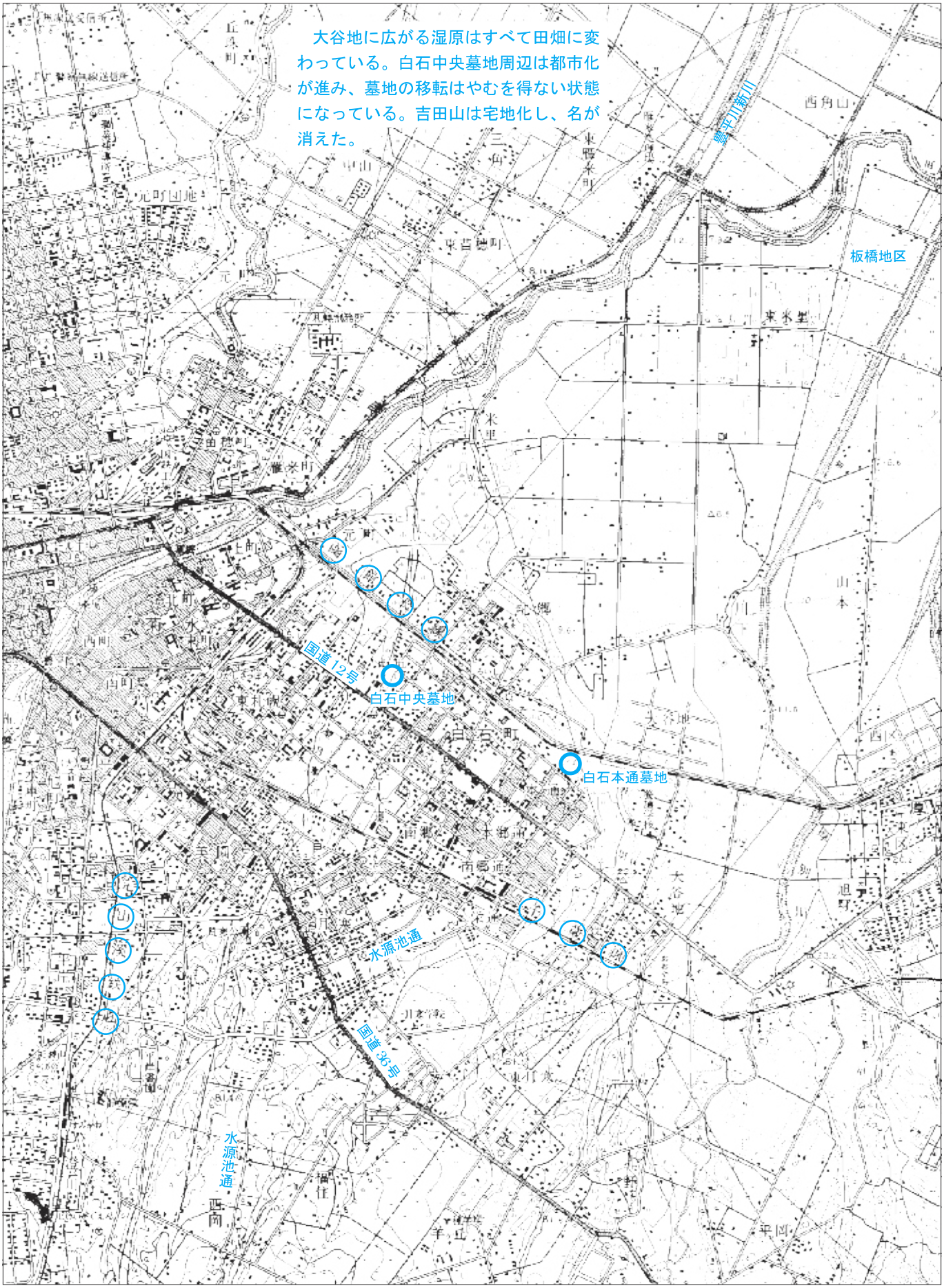
大正５年の５万分の１地形図



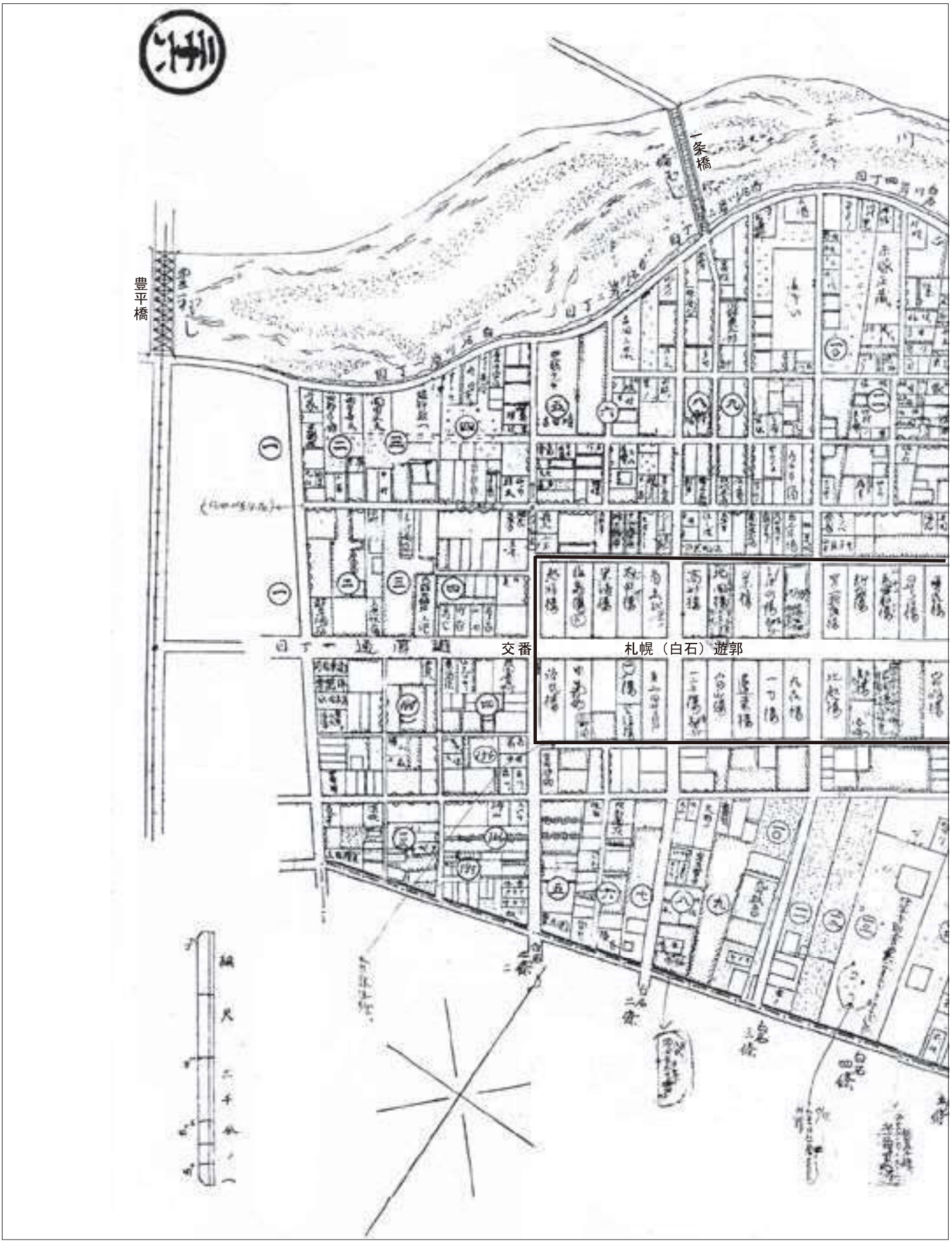
昭和10年の５万分の１地形図



昭和40年の５万分の１地形図



昭和２年上白石地区の住宅地図



東
橋
菊水公園
三共ゴム工業所